

(2) 各学系の研究

① 学校教育学系

ア 研究の特色

学校教育学系は、教育哲学、教育社会学、道徳教育、キャリア教育、生徒指導・教育相談、教育経営学、教育制度・行政学、教育方法臨床、学習過程臨床、情報教育、総合学習、教育実践、教育心理学、発達心理学、学校社会心理学、幼児教育学、幼児心理学、保育内容の研究、生活科教育学（上越教育大学教育研究組織規則【最終改正 令和4年3月24日規則第12号】第3条による）を主な研究領域としており、教員養成大学としての本学の教育・研究の根幹をなす研究領域を幅広く担いながら、それぞれの専門領域の立場から教育実践研究に取り組んでいる。全学的な教職必修科目を担当する教員も多い。加えて、国・地方自治体、地域社会、学校等に至る、全国の教員研修や講演会の講師も数多く手がけており、学術研究にとどまらず、実践的・臨床的な視点を携えながら、広く学校現場に開かれた研究活動に取り組んでいる。専門職学位課程の教員として、「学校支援フィールドワーク」を中心に、学部生・大学院生の指導のみならず地域の学校の支援に大きく貢献しており、また全国の研究会や実践研究の取組もリードしている。学校運営に関する評議員、教育関連の各種委員等を依頼される教員も多く、本学系教員の研究知見は広く学校教育の実践と経営に貢献しているといえる。

イ 優れた点及び今後の検討課題等

本学系は、多領域にまたがって教育・研究に取り組み、学会における研究発表と論文の投稿、著書の刊行なども進めている。また、学外においては、国・地方自治体、地域社会、学校等の各種の研修会・講演会の講師や公開講座、出前講座の講師等でも成果を上げている。

科研費の応募も多くの教員が行い、採択されている。令和5年度新規採択は、基盤研究(C)として「教職員の人事異動区域を単位とした教育条件整備に関する実証的研究」、「他校通級におけるテレコンサルテーションプログラム開発とその効果に関する研究」、「過疎地域・離島を中心に展開する拡散型オンライン教員研修モデルの構築」の3件および研究成果公開促進費1件であった。学内においては、学内研究プロジェクトとして、本学系教員が代表を務める「教育系国立大学で共同構築するメタバースにおける教員養成カリキュラムの開発」、「架け橋期の教育の充実に向けた幼保小の接続のあり方に関する研究」、「SDGsのリテラシーと確認指標の開発研究」の3件が採択された。いずれも現代的教育課題に関する先端的研究であり、学校現場に密着した教育実践研究である。

引き続き、学術的および教育実践的評価の高い研究成果を創出し発信できる環境を維持していくことが、今後の課題といえる。

② 臨床・健康教育学系

ア 研究の特色

本学系では、障害による特別な教育的ニーズのある子どもの教育、心理・生理、教育課程・指導法などに関する研究、学校教育の円滑な実施とその成果を確保していく上で最も基盤となる児童生徒の健康に寄与する理論や方法に関する研究、臨床心理学に基づく、いじめ、不登校、発達障害、非行、虐待、自殺、犯罪被害、地震災害などの問題解決に向けた研究を行っている。特別支援教育実践研究センター、健康教育研究センター、心理教育相談センターをはじめとする臨床研究の場において、学校における喫緊の課題に対応するための臨床的、実践的研究を推進している。

イ 優れた点及び今後の検討課題等

本学系では、各センター及び地域の学校等において多様な臨床研究を展開しており、それらの成果を、『上越教育大学特別支援教育実践研究センター紀要』や『上越教育大学心理教育相談研究』の他、関連学会や大学紀要等において公表している。また、学校及び地域社会を含めた健康教育（学校安全、学校保健）や健康課題への対応に関する研究も行っている。

このような研究活動の一環として、令和5年度は次の学内研究プロジェクトを実施した。

- ・ 小学校と連携した特別な教育的ニーズのある子のチーム支援プログラムの開発
- また、科学研究費補助金により次の4件の研究（研究代表者分）を実施した。
- ・ 若手教員におけるメンタルヘルスの影響因とその対処に関する研究
 - ・ 通級担当教師の自立活動の授業力育成を図る地域協働モデル構築に関する研究
 - ・ 中学生のゲーム依存予防を目的とした学級単位のマインドフルネス・プログラムの開発
 - ・ 知的障害児の実行機能特性の解明と教育的支援モデルの構築に関する認知神経科学的研究

以上のように、本学系では、各領域の専門性を活かした活発な研究活動を展開している。今後は、退職や異動等に伴う研究機能の低下を補うことにより、地域における教育の推進に貢献できる教育・研究活動を更に充実させていく必要がある。また、学系の構成員が兼務教員となっている各センターの機能的な強化を図ることも重要である。特に、専門職学位課程における学校実習の一環として、特別支援教育実践研究センター及び健康教育研究センターの機能を最大限に活用していくための施策を講じることが急務である。

③ 人文・社会教育学系

ア 研究の特色

人文・社会教育学系に属する教員の主な研究領域は、国語学、国文学（近現代文学、古典文学）、国語科教育学、書写書道、英語学、英語科教育学、小学校英語教育、異文化コミュニケーション、歴史学（日本史学、世界史学）、地理学（自然地理学、地誌学）、法律学、経済学、社会学、宗教学、社会科教育学（地理教育学、歴史教育学、公民教育学）と多岐にわたる。各領域で活発な研究がなされており、国際的・全国的・地域的な各学会・研究会において研究発表・論文掲載はもちろん、学会等の運営面においても重要な役割を果たしてきた。

イ 優れた点及び今後の検討課題等

2023（令和5）年度においても、上記の各研究専門領域に関わる優れた書籍や研究論文が、本学系に所属する教員によって数多く刊行・発表された。このことは各種の書籍・論文の検索でも確認することができる。

公開講座や出前講座、学内研究プロジェクトをはじめとする研究成果を活用した学内貢献が継続された。また、地域の行政への協力や学校等での研修会講師などの教育・研究についての学外貢献も多くなされた。他の学外貢献としては、新潟県の新潟水俣病関連情報発信事業において小中学校教員と大学院生・学部生との協働による研究・実践の遂行も継続された。

科学研究費助成事業においても基盤研究（B）2件、基盤研究（C）7件、若手研究2件の新規分・継続分あわせて合計11件が採択されて研究が進められ、外部資金の獲得の面でも大いに貢献した。

大学院におけるカリキュラム検討、組織改編など、多くの検討課題が教員の多忙化に拍車をかけてきた。教育大学として質の高い研究と教育を両立させるため、様々な環境整備に関わる真剣な議論が必要な時期にあると考える。

④ 自然・生活教育学系

ア 研究の特色

自然・生活教育学系は、数学、理科、技術、家庭の4つの専門分野の教員によって構成されている。

数学の分野では、代数学、幾何学、解析学、数学教育学における専門的研究を推進させるとともに、各教員の学術的知見に基づいた算数・数学教材の開発を行った。また、「上越教育大学数学教育研究会総会」の開催（7月29日(土)）や「上越数学教育研究」39号の刊行により、教員ならびに大学院生等の研究論文や実践報告を発表するなど、継続して算数・数学教育実践に直結した研究を進めている。

理科の分野は、教科教育学と教科内容学の学問領域から成り立っている。前者は理科教育学、後者は物理学、化学、生物学、地学からなっており、相互に影響し合いながら理科の分野を構成している。理科教育学では、教育現場で現在求められる課題を含めて多様な分野の研究を行い、これらは学校における理科の授業実践などを改善することにつながっている。教科内容学では、各教員が自分の専門領域の研究を行うとともに、その成果をもとに物理学、化学、生物学、地学における教材開発や素材の研究を行うなど各教員の専門性を背景とした教育研究を行った。さらに、各教員は外部資金の応募に取り組み、研究を深めようとするとともに、上越地域の小・中学校の理科の教員が主催する上越物理・化学同好会や上越科学技術教育研究会のメンバーとなり、会が主催する発表会の講師になるなど地域の理科教育の発展に努めた。

技術の分野では、エネルギー変換技術の研究や、プログラミングやICTに関する技術、木材加工や加工材料に関する専門的研究を行うとともに、全員が専門性を背景とした教材研究を行っている。教科教育研究では技術教育課程開発や技術教材の機能に関する研究を中心に技術科教育の現代的課題を見据えた教育研究を行っている。また、これら教育研究の成果を基に、科研費や研究プロジェクトなど、学内外における各種研究補助金などに積極的に応募している。科研費については、令和3年度採択の「AIとデジタル・ファブリケーションリテラシー育成の初等中等モデルカリキュラム開発」（研究課題番号：21H00860、研究代表者：山崎貞登）に研究分担者として分野の教員3人が協力して研究に取り組んでいる。学外活動として、上越市内、妙高市内において小・中学生等を対象にプログラミングや材料加工に関する学習指導・実践、出前講座および公開講座を対面およびオンラインでも行っており、学校現場の課題に対応した取り組みや地域貢献活動も積極的に行っている。さらに、教職員のための自主セミナーとして、児童・生徒の学びを支援する電子補助機器の製作に関する教育実践の研究報告と題した研究プロジェクト成果発表を開催し、参加者を交えた意見交換を行った。

家庭の分野では、各専門分野における研究及び教育・実践を通して、社会環境の変化により生じた複雑な生活課題を適切に解決することのできる、専門的な資質・能力を持った人材を育成することを目指している。そのために、各種教員研修や地域貢献も積極的に行っている。特に、令和5年度は、市民団体「あわゆき組」の開催する「あわゆき亭（高田の雁木町家を楽しむためのイベント）」に協力した。

「上越発酵鍋開発普及実行委員会」の企画である上越の新名物「さかきん発酵鍋」の開発に関わり、学生目線に立ったレシピを考案し、本学大学祭において発表及び販売を行った。

イ 優れた点及び今後の検討課題等

本学系では、学生の教員としての資質能力を高めることを最優先に考え、教科教育や教科内容の視座からの教材開発やカリキュラム研究に真摯に取り組んでいる。各々の教員は、講義や卒業研究・修士論文を通して、教科の専門性はもちろん、教員にふさわしい思考力・判断力・表現力を備えてもらうべく、責任を持った学生の指導にあたっている。また、本学が主催する出前講座等に率先して参加し、地域貢献の役割も果たしている。

本学系の教員は外部資金獲得にも積極的に取り組んでおり、令和5年度は継続も含め科学研究費補助金の基盤研究(A)及び(B)が各1件、基盤研究(C)が8件、若手研究が1件の交付を受けている。

国際的に活躍している研究者が複数いることは本学系の特に優れた点であるが、継続して学術的評価の高い成果を創出できる研究環境を維持していくことが課題といえる。令和5年度は教職大学院移行2年目となったが、引き続き、それに伴う教育体制の整備・拡充も、重要な課題と考える。

⑤ 芸術・体育教育学系

ア 研究の特色

芸術・体育教育学系に所属する教員の主な研究領域は、声楽、器楽、作曲、音楽学、音楽科教育、絵画、彫刻、デザイン、工芸、美術理論・美術史、美術科教育、体育学、運動学、学校保健、体育科教育といった音楽、美術、保健体育の教科に関連した基礎的及び応用的な研究領域からなる。また、これらの領域は実技指導や作品・演奏発表に関しても地域社会と密接に関わり、近隣の学校や地域において音楽や美術、スポーツの普及・発展に尽力するとともに、コンクールや競技会において審査員や競技審判等を委嘱される機会も多い。令和5年度も本学系では各教員の専門を生かした地域貢献活動が活発に進められたほか、教科や領域を超えた学際的な教育、研究が進められた。

イ 優れた点及び今後の検討課題等

本年度の研究の成果としては、学内研究プロジェクトについては3件、上越教育大学研究プロジェクト「『音楽的な見方・考え方』を深める郷土芸能の授業開発」（研究代表者：尾崎祐司、研究協力者：森英玲菜）、「ICTを活用した音楽（科）授業方法と教材の開発～Society5.0を見据えた音楽（科）教育および教員養成～」（研究代表者：玉村恭、研究分担者：音楽全教員、研究協力者：渡辺奈穂子・渡邊めぐみ・那須洋平）、および兵庫教育大学大学院連合研究プロジェクト「教科指導におけるSTEAM教育の多様性と汎用性に関する国際調査研究」（研究代表者：菅井三実、研究分担者：時得紀子）を行った。

科学研究費については8件、「能の「ことば」の包括的・領域横断的研究に向けたオンライン・リソース構築」（基盤研究A、研究代表者：山中玲子、研究分担者：玉村恭）、「教科等横断的な音楽科授業プログラムの国際比較に基づく開発と評価」（令和4年度～6年度、基盤研究(C)、研究代表者：時得紀子）、「『佐渡の能楽』再考：非専門家による非専従的な取り組みに着目して」（基盤研究C、研究代表者：玉村恭）、「楽譜の旋律を対象とした、人間の感性を模擬する人工知能の開発」（令和4年度～7年度 基盤研究(C)（一般）課題番号：22K12329、研究代表者：川村 暁、研究分担者：長谷川正規 他）、「彫刻の制作過程(プレフィグレーション)に着目した教員養成系大学における教材の開発」（令和2年度～5年度 基盤研究(C)（一般）課題番号：20K02907、松尾大介）、「シンクロトロン光による 青色陶磁器顔料 発と初期染付の技術史研究」（令和4年度～6年度 基盤研究(C)（一般）課題番号：22K00205、兪期天）、「ダンスの教育効果を高めるために不可欠な基本ステップの動感に着目した指導方法の開発」（令和3年度～6年度 基盤研究(C)（一般）課題番号：21K11508、研究代表者：長谷川晃一、研究分担者：周東和好）、「低強度負荷による疲労困憊時になぜ余力は残るのか」（令和5年度～7年度 基盤研究(C)（一般）課題番号：23K10760、研究代表者：松浦亮太）に交付された。

学会活動については、音楽では、日本学校音楽教育実践学会第18回北陸支部例会（金沢大学）で「鑑賞教材：インドネシアの民族音楽 ガムランの演奏体験と授業実践の構想」で話題提供とワークショップを実施した。

保健体育では、日本体育学会スポーツ文化研究部会委員として社会貢献に関わる学会改革の事業に参画した。学術論文掲載数は4編（国際誌1編、全国誌1編、地方誌2編）、研究発表数は7件（国際学会3件、地方学会4件）であった。

教科横断では、学術論文掲載数は3編（国際誌3編）であった。加えて、既掲載の1編の学術論文について日本体育・スポーツ哲学会学会賞を受賞した。

社会貢献としては、音楽では、高田木曜会合唱団の指揮・指導（通年）、けやきの森ジュニア&ユー

ス合唱団の指揮・指導（通年）、妙高市文化ホール、柏崎市文化会館アルフォーレなどの主催事業においての指導・助言、上越交響楽団および北区フィルハーモニー管弦楽団の指揮・指導（通年）、令和5年度学連携地域づくり応援事業（佐渡市）における「芸能を媒介にした地域づくり・交流事業の提案」を行うなど地域音楽文化活動の向上に寄与し、その活動は地元紙にも紹介されている。また、出前講座として「歌唱・合唱講座」、「吹奏楽における作品演奏の実践」、「合奏の基礎—その目的と効率的な方法—」、「ガムランに触れてみよう」、「和楽器・日本音楽の世界」を実施した。その他、「まちなかキャンパス長岡での講座『今夜はシックにクラシック』」、「なおえつうみまちアート『うみまちピアノ』」を実施した。

美術では、「上越市美術展覧会」や「妙高市四季彩展」等の企画・運営への参画、およびグラフィック作成、「八色の森の美術展」や「なおえつうみまちアート」関連のワークショップの企画・運営、小林古径記念美術館主催高校生講座の講師、「新潟県児童生徒絵画・版画コンクール」や「妙高ジュニア芸術展」等県内の児童生徒作品の審査、「ふるさとの風景展」（喜多方市美術館）の展覧会審査等、地域の芸術文化振興に大きく寄与した。また、公開講座を通して大学での研究を社会に還元した。

保健体育では、新潟県幼児期の運動習慣アップ指導員研修会講師、妙高市教育委員会幼児期運動指導アドバイザーおよび幼稚園教諭・保育士研修会講師、新潟県中学校教育研究協議会指導者、糸魚川市学校教育研究協議会指導者、上越市教育委員会部活動地域移行推進委員会委員長、糸魚川市教育委員会部活動の地域移行に関する検討会議座長、富山県教育委員会中・高等学校体育実技指導者講習会講師、上越市立体操場「ジムリーナ」の活用に関するアドバイザー、上越市教育委員会健康づくり推進課・スポーツ推進課と共同した上越市オリジナルの健康運動プログラム教室「上越—健康運動プログラム教室(J-WELLNESS)」講師、新潟県立武道館開館に開設された体力測定事業（高齢者向け）に関する体力測定プログラムの立案・提供および剣道教室講師、運動部活動指導員研修会講師（附属中学校、妙高市教育委員会）、全日本体操競技団体選手権審判員等として、地域の体育・スポーツ事業等に参画した。

教科横断では、上越市スポーツ推進審議会（上越市教育委員会）で会長を務めた他、魚沼市教育振興会小学校保健・体育部研修会、柏崎市立鯖石小学校公開授業研修、長岡体育サークル授業研究会、中越体育研究会、中郷ジュニアXCスキー育成会結成20周年記念講演会、スポーツ活動の環境整備に向けた上越市指導者講習会で講師を務めた。

このように学系所属の教員により活発に研究が進められ、その成果が地域社会に様々な形態で還元された。

今後の課題として、令和4年度からの教職大学院への移行に伴う大学院の定員確保の観点も含め、本学がより魅力ある研究機関であることを発信するためにも、さらなるそれぞれの専門領域に関する研究の充実、社会貢献も含めた研究内容の還元や地域事業への積極的な参画などが挙げられる。